

[成果情報名] 「賀茂十一野菜」‘ツルナ’の収穫方法と収量性

[要 約] 伊豆地域に自生する‘ツルナ’は、主枝から伸長する側枝を収穫することで、安定して収量を確保できる。側枝を1節残すことで、そこから新たな側枝が伸長する。1株から最大6kg程度収穫できる。

[キーワード] ‘ツルナ’、主枝、側枝

[担当] 静岡農林枝研・伊豆研セ・栽培育種科

[連絡先] 電話 0557-95-2341、電子メール agriizu@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 野菜・花き（野菜）

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

賀茂地域では、食用として有望な‘ツルナ’が自生しており、「賀茂十一野菜」に位置付けて利用推進を行っている。ここでは、ツルナの栽培に適した肥料体系及び収穫方法について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 ツルナは、8月には種し、9月に株間50cm、畝間1mで定植すれば11月から翌年の11月まで収穫できる（図1）。冬期の収量は少なく、4月以降に収量が増加する（図4）。
- 2 8月は暑さや乾燥により伸長がゆるやかになり収量が減少する。また、12月から2月にかけての寒さによっても生育がゆるやかになる。霜に当たると枯死しやすい。
- 3 ツルナは側枝が20cm以上に伸長すると、花芽が付き、茎が硬化して食用に適さなくなるため、20cm程度まで伸長したところで、側枝の付け根から1節残して収穫する（図3）。その節から腋芽が発生し、新たな側枝が伸長する。
- 4 腋芽の多い太い枝を主枝として、生育が旺盛になる4月から5月にかけて、3～5本になるよう仕立てる。
- 5 元肥は5kgN/10aの投入量が、株の生存率が最も高く、1株当たりの総収穫本数が 657.3 ± 79.0 本、総重量が 6187 ± 770.1 g程度になる（データ略）。
- 6 ツルナの収穫した側枝1本当当たりの重量は、高温期となる8月にかけて、葉が小さくなるため、低くなる傾向がある。
- 7 食味はハウレンソウに似ており、炒めたり揚げたりすることで、苦味が抑えられておいしく食することができる。

[成果の活用面・留意点]

- 1 ツルナは種後、徐々に発芽を開始するが発芽率が40%以下と低いので、予め多めにポットには種し、1ヶ月程度育苗して本葉が2～3枚展葉してからほ場に定植する。
- 2 主枝は折れやすいので、ある程度伸長したら風で揺れないよう固定する。
- 3 収穫物の品質を維持するため、開花、結実しないよう定期的な収穫を行う。
- 4 放任栽培すると、1株あたり最大3m²程度まで展葉伸長する。その後主枝及び側枝に多数の開花、結実が見られる。過繁茂状態になると葉が小さくなり、収穫物としての品質は落ちるため、収穫を通じて側枝に開花、結実しないようにする。
- 5 採種は、ツルナを植栽して1年後の6月～8月に黒色になった種子を対象とする。常温保管では発芽率が低いため、採種後は冷蔵庫で保管する。

[具体的データ]

	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
露地栽培								○	◎			
○ : は種 ◎ : 定植 ----- : 育苗期間 ————— : 本圃生育期間 ■■■■■■ : 収穫期間												

図1 ツルナの栽培体系



図2 ツルナ収穫物

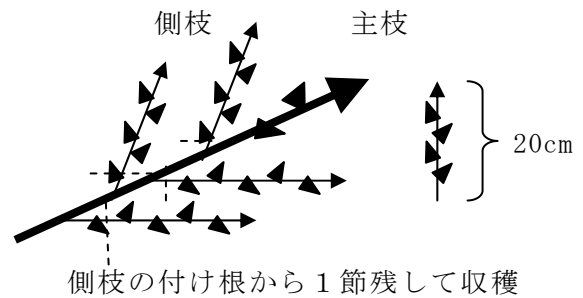


図3 ツルナの収穫方法

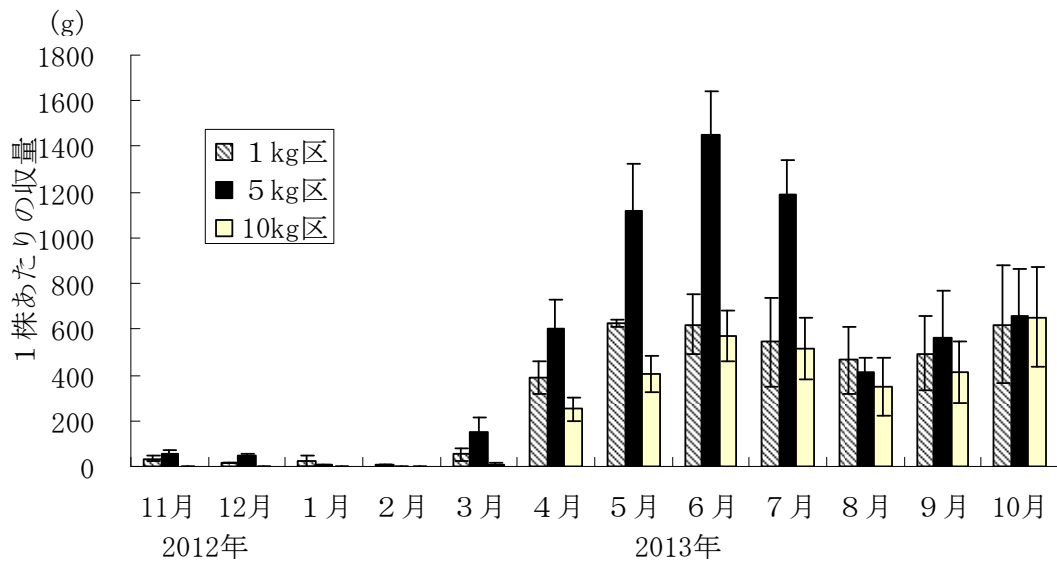


図4 ツルナの元肥施用量別に見た月別収穫量

[その他]

研究課題名：伊豆の観光活性化を支援する園芸商品の開発

予算区分：県単

研究期間：2011～2013年度

研究担当者：山際豊、杉山泰昭